

作品名：《いのちの起源（A-1）》 2015年 Ø 155cm

2014年、国立天文台野辺山の4.5m電波望遠鏡によって、アミノ酸の基になるメチルアミンが、星形成領域の宇宙空間で、大量に存在している事が見つかった。アミノ酸は生命の存在に欠かせない物質である。はたして生命の誕生と、星の誕生にはどのような関係があるのだろうか？その答えを探求する事が今回のレジデンスの目的であった。初夏の野辺山の景色は牧歌的で、雰囲気は平和的である。そして空には広い宇宙がある。空想すれば、そこには宇宙空間で単体で生きられる生命が存在するかも知れないし、代謝、自己複製する星があるかも知れない。科学者が電波によって観測した宇宙は、モノクロの画像を分かりやすいように着色して伝えられる。その方法に国際的なルールがあるわけではなく、科学者間のいくつかの共通認識によって、1枚の写真の中で、どの波長の電波をどの色にするかが決められている。今回はこのプロセスを作品に反映させた。またレジデンスの対話の中で、宇宙の全体像についての話にもなった。そこから、ポアンカレのいう三次元球面のように、宇宙を、直進するとまた元の場所に戻ってくるような閉じた系（球）だと仮定すると、空間の歪みに左右されない直線を作り出す事が出来れば、理論的にはその宇宙の外の次元に出る事が出来るだろうというアイデアも生まれた。宇宙といのちは1つのものなので、いのちとは何か？を考える時、宇宙の全体像を把握する事は重要だ。たとえそのイメージが不完全だとしてもである。

プロフィール

1980年浜松市生まれ。父は洋画家の青島三郎（1937-2001）。絵画、彫刻、コンセプチュアルアート、舞台美術、絵本など多様な表現手段で、文明が自然と調和するための方法を探る。確かな技術によるクオリティーの高い作品に定評がある。特に石彫による『葉っぱ』は、故宮博物院の『翠玉白菜』に並ぶ名宝と言われることがある。近年の若山美術館の個展では、絵本の余白と美術館の空間を、融合させたコンセプチュアルなインスタレーションを展開した。石彫の『葉っぱ』を発表（2005年、市田邸／東京）。「日韓現代美術交流展」出品（2007年 BankART Studio NYK／横浜、2008年 Moran Gallery／ソウル）。「原始感覚美術祭」出品（2010年～2015年、長野）。イマージュオペラ>>ミトロジック<<「古の夜々の月」の舞台美術を担当（2010年、浜松城、文化庁助成）。インターネット上で『©Earth』を発表（2012年）。「ほわほわ展」（2014年、若山美術館／東京）。「食とアートの廻廊」出品（2014年、長野）。著作『おつきさますーやすや』（2008年）、『ほわほわ』（2013年）（共に福音館書店）。大町市在住。